

持続と位相

星野 雅彦[†]

Duration and Phase

Masahiko Hoshino

1. 序論

1.1 美の本質

美の論証は、私たちを取り囲む自然の諸現象に美の原因を精査し、世の移ろいを超えた普遍的な原理を求めて、世界の実相が明示的に記述されなければならない。本研究は、美の諸相、美の本質を論じるに先立ち、生命や自然、宇宙のように連続し複雑に絡み合う、この世界の在り方や現れを考察、検証の対象として位置づけ、美の本質へとつながる哲学的方法論に依拠して「美とは何か」を問い、美そのものに及ぶ可能的見解を論証する試みである。

物質と物質の幾層にも折り重なった境界に立ち上がる関係性とその差異を物性と呼びながら、各々の相に与えられた複雑な秩序と運動の過程に表象する美の位相が、多様な視点から検証され、基礎づけられていくことが、本研究における議論のはじまりと言えるだろう。このように実在する現象世界の考察を重ね、その論証の目的は、蓄積された諸見解を形而上の水準に高めて美の本質を論究することにある。

1.2 全存在連鎖の自然

美は現象する物質の中に、「全存在連鎖の自然」[1]の摂理を内包し、秩序や均整、調和といった関係性を示唆しながら表象している。目的性を内包する生物の組織や機能、無機的な結晶構造や天体の運行に至るまで、それらは見えない自然の仕組み、宇宙の秩序が可視化、形相化された諸事象である。表象に秘められた現象世界の普遍的原理に対して、美それ自体に対する最も重要で普遍的な問いが要請する、秩序のはじまりと過程、目的論的な世界観における要素や運動の原因を自然哲学の内に位置づけ、この世界の存在、あるいは神の存在、それ自体を再考し、相応しい語を選びなおす必要があるだろう。及び難い美そのものへの言及には、自然における多様な美の在り方を考察し、その根源を問う議論が重ねられなければならない。

2. 遍在する美の表象 —現象世界の写像—

私たちはここから、生命や自然、宇宙へと連続する世界における多様な運動の過程における現象を扱い、個別性を包括する普遍性へ、特殊性を拡張した一般性へと考察の水準を高めて、現象世界の全体を捉え直す試みに臨む。本章では、自然や宇宙に遍在する美の表象を「有機的、目的論的領域」、「無機的、機械論的領域」そして「統一的、超越論的領域」と題した節を設けて現象の典型的議題として扱い、自然や宇宙がいかに存在しているのかを問いながら、その問いに導かれた領域における美の実相を描き直し、自然の有する実在性を明示的に論じる。そして、現象世界の内的な原理に言及することは、統一的な新しい視座を導き自然万有の理を問う「形而上学的領域」に辿り着くまでの、多くの見解を与えてくれることだろう。

2.1 有機的、目的論的領域

2.1.1 ピュシス (φύσις) —内的合目的性の考察—

アリストテレス (Aristoteles BC384-322) は『形而上学』第五卷、哲学用語辞典と称される第四章の「ピュシス (自然、実在)」において明解な自然概念を記述している。「第一の主要な意味で自然と言われるのは、各々の事物のうちに、それ自体として、その運動に始まり (始動因) を内在させているところの、その当の事物の実体 (本質) のことである。というのは、事物の質料が自然と言われるのは、質料がこの実体を受容しうるものであるがゆえにであり、また事物の生成し成長する過程が自然と称されるのも、この過程がまさにこの実体から始まる運動なるがゆえにであるから。また自然的諸存在のうちに、可能的にせよ現実的にせよ内在しているところの、この事物の運動の始まり (始動因) も、この意味で自然である」[2]。この引用は青山昌文の『美学・芸術学研究』における「自然美と芸術美」の自然美において言及され、「このような、根源的にして能動的・生命的なものがアリストテレスにおける自然なのであり、それゆえに、自然美は、本源的にして

[†]2020年度修了 (人文学プログラム)

根本的なもの」[3]であり、「まさに、そうであるがゆえに、アリストテレスにおいても、プラトン（Platon BC 428/427-384/347）と同様に、自然美は、低い位置どころか、極めて高い位置を原理的にその美学体系に占めている」[4]と指摘して、美学研究において、自然の考察、殊に古代ギリシャ哲学における自然の根源的探究の重要性について示唆している。

2.1.2 機能美と関係性

目的論的構造の考察—アリストテレス『動物部分論』—

草木の花々は媒介する昆虫を誘導するための構造と色彩で受粉へと誘い、果実は種子を内包しながら赤く色づき甘美な芳香を放って鳥や獣の捕食を促している。有機体組織としての生命に現れた形や色は、生物個体の典型的な表象として各個体に現象し、それぞれの機能と目的のために外部へと開かれている。自然によって与えられた生命の形相は「運動させまたは静止（停止）させる原理（始動因）」[5]を絶え間のない生成変化のうちに捉えられた、合目的的事物の総体であると考えられる。動物の運動に関する骨格の原理と構造、植物の葉脈や維管束に見られる機能的な配置など、自然物の造形に私たちは美を確かめているように、アリストテレスは『動物部分論』の中で、自然の所産として存在する生物の、感覚器官や臓器などの持つ諸機能を考察して「自然物には偶然性ではなく一定の目的性が、しかも最もよく認められるからであって、その存立や生成の目的は美の領域に属することである」[6]と述べている。動物の有する構造には、緻密な目的性に裏付けられ、そこに自然が生み出した秩序や合目的な表象を認めることができる。その領域を考察することは美的存在を確認する行為でもあり、自然における数多の動物の部分機能を目的をもって詳論されている。生命や自然、宇宙といった対象を、哲学的な視点を用いて考察の対象とする場合、少なくともそれらの対象が私たちの存在とは不可分であり、この世界の連続性を把握することこそが、『動物部分論』を通して獲得されるべき重要な視座である。

調和的な全組織

自然に存在している事物のうち、自然の有する機能の中に顕在化した美の諸相について、ディドロ（Diderot, D. 1713-1784）の哲学的、美学的思考を頼りに、實在論的な世界像を考察したい。私たちが眺める自然には、動植物の合理的、合目的な機能が示されており、「全体的調和（économie）を構成」[7]しながら環境世界の構造を決定している。青山昌文は、連続し関係し合いながら存在している宇宙を含む全体像を「全存在連鎖の自然」として導き、ディドロの自然観として論じている。そして、総合的な自動機械を構成している有機体組織に内在している関係性を示し、「美は、この機能を最高度に遂行することのできる調和的な全組織という、優秀な形態構造の内に根拠をもっている」[8]として、アリストテレスによって語られた生命としての形相に、合目的な機能と構造それ自体が、美として存立していることを提示する。自然界の姿とは、生物

個体を取り巻く環境世界の在り方が可視化された関係性そのものを示しており、魚の鱗によって水が、鳥の翼によって大気が、馬の蹄によって大地がそれぞれ存在し、個体と環境の境界に際立つ有機体組織として機能し、その形相を具体的に意味づけている。つまり有機体組織の内にした諸器官は、世界の本質に従属的な形相に他ならない。生命や自然、宇宙といった現象世界におけるあらゆる存在が、まさしく「全存在連鎖の自然」の環の中にあり、私たち人間としての存在も素粒子から全宇宙へと連なる諸要素の結合の結果として、深い関係性を原理的に捉えられる。それゆえ、自然によって形づくられた自然諸物の形相には、人間の知覚や認識を超えた幾重にも折り重なる関係性が内包されており、一存在自身の内に含みもつ存在充実として、實在論的な美の論拠が示されていると言ってよいだろう。

2.2 無機的、機械論的領域

2.2.1 コスモス（κόσμος）—調和する内的構造—

ここでは哲学的視点の根源に立ち返り、古代ギリシアで宇宙や秩序づけられた世界を対象とするコスモス（κόσμος）の語について概観し、現象する世界をどのような視点で探究すれば良いのか、その哲学的方法論を基礎づけておきたい。廣川洋一（1935-2019）は『『コスモス』としての自然万有は、自然万有のいかなるあり方について語られたものであろうか』[9]との前提を用意して、コスモス（κόσμος）の用法に言及している。コスモス（κόσμος）の語が、宇宙や秩序として意味されるためには、調和的に組み立てられ、構成される宇宙自然の理論的認識が、重要な要素であることが語られ、さらに、「もろもろの要素から成り立つ、あるいは一定の内的構造をもつコスモスを私たちは思い描くことができる」[10]として述べている。さらに、コスモスの包括的な意味について言及された、本研究全体を通して深い関連性を持つ、廣川の言葉を引用しておきたい。「コスモスに含まれる全内容が『万有』（タ・パンタ）といわれている。自然万有は、日月星辰、山川草木だけを意味しない。それはあらゆる動物、人間をも含む、およそこの宇宙世界におけるいっさいのものを意味する。それは、すでにピュシスとしての自然の総体について省みたように、宇宙生成の同じ元のものから、同一のプロセスによって生まれでたもの、すなわち生命あるものである」[11]。このような見解は、生命や自然、宇宙といった現象する世界の実相を考察の対象とした本研究の課題に通底する考え方であり、その論題に必然性を与える、重要かつ示唆的な論述となっている。コスモス（κόσμος）の語が基礎づけられることによって、世界に現象している物質的存在が調和的に組み立てられ、構成された宇宙の秩序そのものとして明確に位置づけられ、その後に展開する表象を超えた存在の本質へと議論を進める際に求められる、一つの重要な起点となることだろう。

2.2.2 連鎖する環境

純粋な美的表象—目的を介さない自然の様相—

世界を認識している精神や意識と称される生命活動が目的に由来する活動であるとすれば、宇宙の星々や山岳の稜線、鉱物の結晶などの生成変化に対して、人の精神や意識は目的を探し出せない。合目的な現象は、実に限定的な領域での現象であり、この地球上の表面を覆う生物圏に与えられる、いわば局地的な共有現象である。仮に、天体の運行や地球の自転、沸き立つ雲、そよぐ風に何かの目的を与えるなら、ここには神の存在を要請することになるだろう。私たちがここで考察の対象とするのは、天体や気象、物質の化学的、物理的な諸現象といった合目的には論じ得ない世界の諸相であり、人間を含む躍動する生命を対象とする有機的、目的論的領域とは対照的な無機的、機械論的領域に現象する美的表象である。純粋な美的表象として議論された目的を介さない物性の表れのひとつである結晶化とその構造には、極めて正確に与えられた秩序と構造が伺える。生命にとって最も基本的な水も、雪の結晶となって美的構造を持ち、光のスペクトルを取り出すために用いたプリズムや、非結晶な構造を持つガラスそれ自体にも、私たちは美を受け取ることができる。物質の様々な現象には、自律し秩序を形づくる物質の自己組織化能力は示されているが、その過程を司り、見通す理性的存在は登場してこない。こうした無機的表象からは経験や慣習に依らない、むしろ「美」の語よりも先んじて、私たちは直感的に美を受容しているように思われる。そこには主客未分の領域があり、直感や純粋な経験として位置づけられた哲学的視点によって、さらなる論拠が示されることになるだろう。

宇宙と無限性—ブルーノの宇宙観—

宇宙や星空のような「無限存在をまのあたりにして、その無限存在のただなかにつつまれる感動」[12]は、「小さな人間の世界をはるかに超えて、〈廣大無辺な無限世界に抱かれる感動〉であり、〈世界と合一する至福の感動〉」[13]と有限の私たちと無限の宇宙は「無限世界に本質的に関わっている」[14]として青山昌文は「無限世界との合一の美」[15]を定義し、自然美の無限性に内包される美を論じている。

近代科学の黎明期、宇宙の無限性を論じたジョルダノ・ブルーノ (Bruno, G. 1548-1600) の宇宙観を考察に加えて、この世界の無限性について考察する。清水純一 (1924-1988) はブルーノの宇宙観、世界観の要点をまとめて次のように論じている。「宇宙は無限である、無限の宇宙には、したがって、限界もなければ中心もない。そこには無数の万物が、相対的に、等価値的に存在している。廣大無辺の宇宙を探すならば、われわれ人間が居住している太陽系の如き世界は、他にも沢山あるはずであり、その何処かには地上の生物の如きものも存在しているはずである。無限の宇宙のなかで、無数の事物が、たえまない生成流転を繰り返している、それが世界の実相である」[16]。私たちが本研究の中で幾度となく確かめられてきた、宇宙

観や世界観、万物の在り方はその本質において支持されるべき内容が、見事に展開していることがわかる。そればかりでなくブルーノは「この生成流転の底に、たんなる混乱ならぬ、調和的律動を見出す。そうした律動をつかさどるものは、宇宙の万物に偏在している生命、事物の霊 (anima) である。石も、草木も、星も、すべては生きている。万物が不断に変転し形を変えつつけるのは、その形相を外から受けとるからではなく、自己に内在する霊の力によるのである。ここに自然の神性がある。しかもこの霊は、本来的な普遍的な唯一の実体であって、『変遷する万物の根底につねに変わらぬ一』としてある」[17]として、私たちが、次項から考察する生命と生命でないものとの境界の消失を示唆している。ルネサンス的特色を最も豊かに備えた思想を生み出したブルーノの思索だが、ブルーノの生きた時代こうした世界を創造した神を超えることは許されるものではなかった。「ブルーノが焚刑に処せられた一六〇〇年をもって、ルネサンスの時代に境界線を引くことが定道とされている」[18]が、わずかな後に、ガリレオ・ガリレイ (Galilei, G. 1564-1642)、ニュートン (Newton, I. 1642-1727)、デカルト (Descartes, R. 1596-1650) へと続く自然哲学の急速な展開が待っているとは言え、世界、宇宙の新しい見解を示すことは、文字通り命をかけた研究であったことを伺い知ることができる。

2.3 統一的、超越論的領域

2.3.1 因果性と目的論—マッハの両領域の横断的見解—

有機体を構成する物質の自律的振る舞いと秩序形成に関する具体的な議論に先立ち、多分野にわたる横断的な研究で知られているオーストリアの物理学者であり哲学者でもあるエルンスト・マッハ (Mach, E. 1838-1916) は知識領域の境界線に見解を示唆してこのように記している。「相異なる領域が一時的にもせよ聯結することによって、諸概念の転態がもたらされる。この転態によって概念が明晰になり、その概念が成立したもとの領域を超えて他の領域にも適用できるようになる」[19]。マッハは諸概念の転態を促す契機が有機体の物性研究であることを、「ダイナミックな平衡状態」[20]そして「一つの体制」[21]と言う語によって示唆し、私たちがこれから探究する物性の必然性と根拠を与える内容となっている。マッハはさらに「二元論ではなくして、有機的なものと無機的なものとを包括し、両領域に共通な諸事実を講述する一個の科学が姿を現すであろう」[22]と述べている。このような新しい知見を、美の原因として考察し、また、諸現象を化学や物理学といった分野の領域を超えた研究知見を参照しながら、本章「遍在する美の表象」を包括する議論を展開していくことにしよう。

2.3.2 二領域の境界

物質の能動性、自律性と自己組織化

物質の能動的とも見られるような自己組織化の現象は、自然世界の摂理が物質のあるべき形相に導いた、言い換え

れば、世界の仕組が物質に立ち現れる現象を通して、可視的な構造へと生成させたことを示唆している。生命や自然、宇宙のような現象世界の全体的視点において考察する場合、物質が原子レベルで寄合分子を構成し、それら分子同士が有機体を構成するように傾いたその刹那、その契機それ自体が物質と生命を考察する重要な境界とすることができる。プリゴジンの言うような物質から生命への転移を散逸した構造が回収されていく過程として捉え直すこともできる。シュレーディンガー (Schrödinger, E. 1887-1961) によれば、生命は「現に存在する秩序がその秩序自身を維持していく能力と秩序ある現象を新たに生み出す能力を持っている」[23]法則に従わない疎から密への運動が起こる。この生命の秩序形成過程に対して、エントロピー増大の法則に抗する「負のエントロピー」[24]という概念を提示することとなる。無機質な岩石に覆われた世界に生命誕生の原子レベルでの考察によって、ある小さな有機体が構成された私たちに繋がる奇跡的な出来事を、哲学的視座をもって考察を試みることの意義は大きい。

ハンス・ヨーナス (Jonas, H. 1903-1993) は『生命の哲学』の中でこう述べている。「太古の有機体的実体がかすかに動いた際に、恒星や惑星や原子にはない自由と言う原理が物理的宇宙の持つ無限に広がる必然性の中で、初めてきらめき出したということを示すこと、それこそがこの探究の重要な関心の一部なのである」[25]。物質の諸現象、物質の代謝にも似た力学的、時系列的变化における諸現象に、物質の恒常的な印象とは違った一連の流れの中に現れる位相に、美の兆候を看取していることには違いない。ある物質が複雑さを増しながら拡散していく現象も、視点を転じれば、またある別の秩序へ向かう能動的な現象であるとも言え換えられる。崩壊は再構成の予兆であり、再構成は崩壊を内的に含んだ一過程に過ぎない。現代に続く生命論にまで射程は及び、無機から有機、また、有機から無機へと循環する世界の在り方の全く新しい見解を示して、物質の能動的、自律性を探究したプリゴジン (Prigogine, I. 1917-2003) は、宇宙・生命・社会のあらゆる現象に見られる秩序形成過程の具体例を探り、散逸構造や進化の諸理論がはらむ新しい世界観構築への展望を提示することとなる。

美的表象の自己相似性 —フラクタルとカオス—

山々の稜線や打ち寄せる波と海岸線の形状、縫うように流れる河川、樹木と葉に張り巡らされた葉脈、そして雲や稲妻の閃光、台風や乱流に見る気象現象の形、ひいては宇宙の銀河から星雲や銀河団に至るまで、私たちを取り巻く自然界の形は複雑で混沌として多面的かつ連鎖的である。そのため微視的、巨視的双方のスケールの相違によって、そのものの形は解体され、そのものの見方は変容し、ものの本質は問い直される。こうした自然界の「ユークリッド幾何学では表せない非再現性の形や、複雑で客観的な判断の困難な現象であり、数値や方程式ではあわせえない。しかし、定量化できないと思われていた形体や現象の理解に」

[26]対して、フラクタルと称される理論を提唱したマンデルブロ (Mandelbrot, B. 1924-2010) は、自然の見方に対して自己相似性と称される概念を導き、そのことで科学的な見方のみならず、哲学的、美学的見方にも変化を与えることとなった。『フラクタル幾何学』には、存在への問いかけがあり、新たな視点が導入され、さらにはその視点が「形」に対してもたらした概念と、美の在り方を大きく変容させたと言ってよいだろう。このような視座は、概念としての「世界」の存在を認めない新しい存在論に見られる、対象世界が解体され、還元されていく議論に共有される。マルクス・ガブリエル (Gabriel, M. 1980-) はフラクタルの概念を考察の対象にして以下のような議論を展開した。「世界それ自体が果てしなく遠ざかってしまうという事態は、フラクタル存在論の一形態として考えることができます。〔中略〕世界は、いわばフラクタルのように、当の世界自身のなかへと無限回コピーされ、まったく同じ形をした無数の小世界からなっている」[27]。ガブリエルによる示唆は、私たちの研究における還元的な存在論と同調する多くの局面を有している。美の概念に対し、自己相似性やフラクタルは、自然の捉え方が単なる点や線や面で構成されたものではなく、「無限に」複雑な形をしていることを、数学的な手法で解を導き、自然の有する形相へ根源的な問いを提示している。

3. 自然万有の理 —哲学的始原への回帰—

3.1 そのものへの問い —初期ギリシャ哲学の視座—

宇宙の無限性を問い、天蓋の形状に想いを馳せながら、やがて、大地に立つ私たちの存在を問い、宇宙の一点において宇宙そのものをも問うた、知的営みの起源に触れておきたい。壮大な宇宙論的発想の中で育まれた自然哲学と称される創造的思考を頼りに、自然の在り方を論じ、この世界の普遍の実相、実体の本質へと言及されていくことになる。様々な伝承として、また実際の断片として現在に伝わるソクラテス以前の哲学者が有する世界観に対して、ジョン・バーネット (Burnet, J. 1863-1928) は、ひとつの普遍的な概念を導き、その著作『初期ギリシャ哲学』の序論「ギリシア人の宇宙論の一般的性格」において、以下のような指摘をしている。「初期の宇宙論者は〔中略〕対立しているものよりもっと第一義的なもの、あらゆる変化を通じて存続し、相互の変化のなかのただ一時的な形態としては留まらないものを探索していた」[28]。私たちはこの普遍的対象の中に、これからはじまる議論を通して探究されていく「そのものへの問い」につながる重要な指摘を読み取らなければならない。

3.2 自然、宇宙の普遍的原理

3.2.1 自然哲学の始原

反復と循環の範型 —タレス—

アリストテレスは『形而上学』で「あの最初に哲学した

人々」[29]として哲学の始原を探り、タレス (Thales BC624頃-546頃) が知恵の愛求〔哲学〕の始祖であり、「水」がそれであると言っている。熊野純彦はアリストテレスの証言を受けて「タレスの『水』という一語とともに、なにかが開始されたことはまちがいない。なにか、それをめぐる問いが立てられている。それとともに開始されたものとは『哲学』(フィロソフィア 愛知)である」[30]と指摘している。また、廣川洋一はタレスにおける水を単なる物質としてではなく「生命原理、つまり魂(プシケ)にはかならない。生命原理としての元のもの、水から成るこの自然万有はしたがって生命をもつ『生ける自然』なのである」[31]として、タレスの考察を結んでいる。蝕を予言し、エジプトの幾何学を採り入れ、政治家としての側面をも記録に残すタレスは物質としての水に留まらない普遍的な原理を読み取ることができる。

定量の生成と定量の消滅 —ヘラクレイトス—

ソクラテスは『クラテュロス』の中で、古来の知慮を語るヘラクレイトス (Herakleitos BC500頃) について以下のように語っている。「たしかにヘラクレイトスは『すべては去りつつあり、何ものも止まらない』と言っているね。そして有るものを川の流れにたとえて『汝は同じ川に二度と足を踏み入れることはできないであろう』と言っているようだ」[32]。バーネットによれば「万物は流転する」の語句はヘラクレイトスの考えを的確に記述していることは確かではあるが、後世にヘラクレイトスの断片のように受け取られるようになったと述べている。ヘラクレイトスの「すべては去りつつあり、何ものも止まらない」、そして、世界は生成変化の過程そのものであるとする考えかたは、多くの哲学者に求められた。「定量だけ燃え、定量だけ消えながら」[33]ものは安定して存在する、そこに存在の本質を語る。私たちの身体も、食物を体内に取り込み、消化、吸収され、代謝によって安定した平衡状態を保つように身体を維持し、持続させることができる。こうした秩序世界、ものの在り方を批判的に捉えて、あるものがあらぬものへ、あらぬものがあるものへなることをけっして承認しなかった哲学者、パルメニデスが現れる。

3.2.2 真に「ある」もの

「ある」ものと「あらぬ」もの —パルメニデス—

私たちは、「ある」ということに不動の何ものかを想定するのではなく、存在はなりつつ「ある」のであって、実態は生成過程の流れの中にあることを、世界の在り方として理解を深めているところであった。ここで存在のありかたにひとつの新しい見方を与えたのが、先に提示したパルメニデス (Parmenides BC515頃-450頃) である。廣川洋一はこのパルメニデスの新しい見方に関して以下のように述べている。「パルメニデスに先立つ哲学者たちは、タレス以下、この生成変化する多様な世界を所与のものとして受けとめ、この世界の起源、さまざまな現象の背後にある根本物質、根本物質からの世界の生成といった問題にその関心のかかなりの部分を注いでいたことは、すでに私たちが

みてきたところである。しかし、彼らが当然のこととして受けとめてきた生成や変化はいずれも、パルメニデスにとって、あるものがあらぬものになること、あるいはあらぬものがあるものになること、であり、『理(ロゴス)に従う』かぎり、けっして容認することのできないものである」[34]。これを契機に、「ある」がそもそもどう言うことなのか、「あらぬ」を真に語るとは可能なのか、厳密に問い直されなければならなくなった。パルメニデスによって語られた「純粹のロゴスによって判定される実在の世界と、感覚によって示される現象の世界との関係」[35]は後のプラトンに色濃く影響を与え、真の存在があるとする世界像を理論立てていくこととなる。

実体への探究とアトム —レウキッポス、デモクリトス—

タレスにはじまる元のものへの探究はやがて、存在それ自体の在り方に向けられ、パルメニデスの存在論が「ある」こととして、真に実在する在り方へ思考を促した。様々な事物の生成、消滅、運動、変化、現象の多様性を迷妄として否定した「パルメニデスの根本格律を受け入れ、それ自体は不変不滅である幾つかの基本的存在を想定して(すなわち何らかのかたちで『多』をはじめから前提して)、それらの組み合わせを変えて—混合と分離—をもって生成・消滅の観念におき代える」[36]試みを、原子論者たちは主要な課題に位置づけて取り組んだ。アリストテレスは『形而上学』において、「すべての事物の質料としての原因」[37]に言及している。「ある」ものとして規定された原子は、形態と配列と位置の違いによって差異が生じるとして、原子の振る舞いと存在の在り方についての原理を論じている。レウキッポス (Leukippos BC435頃) とデモクリトス (Demokritos BC420頃) によって成し遂げられた原子論的思考は、現代の自然科学における物質の在り方へ繋がる、分析的、還元的視点を与えることになる。実体への探究とアトム (ἀτομο) と名辞された概念によって、世界の事象がアニミズム的世界観から切り離される、新しい世界の見方を獲得するが、廣川はそれを意味なき「必然」として正確に位置づけ、「それまでのギリシア思想の全伝統にたいして、この点において真に新しい視点を提起したといえるだろう」[38]と指摘し、「宇宙の全歴史は、ある知的な原理によって支配され、一定の目論見の下に統御されているのではない。それはむしろ、意味なき『必然』によって、すなわち原子の衝突と結合を支配する法則によって、決定されているのである」[39]と結論づけている。

4. 持続と位相 —形而上学的領域—

4.1 形而上の実体

現象学的領域から形而上学的領域での論考に進むために、「形而上学」について基礎づけておくことにしたい。アリストテレスの著作の中で「第一の哲学」としてひと纏まりになった一群が『形而上学』と称されるようになった経緯を熊野純彦は端的に説明している。「紀元前一世紀に

講義録が再発見されたとき、それを編纂した当時のリュケイオンの学頭、アンドロニコスが、アリストテレス自身は『第一の哲学』と呼んでいたものにかかわるノート群を『自然にかかわる』著作群のあと(メタ)に置いた。『形而上学』という名称は、この偶然に由来し、やがては自然学を超える講義ノートという意味をもつことになる[40]。第一の哲学として語られた形而上学について、出隆(1892-1980)はその概要を端的に論じた『形而上学』におけるアリストテレス自身の記述を指摘し、形而上学が第一の哲学と称される根拠を示して、「存在を存在として研究し、またこれに自体的に属するものどもをも研究する一つの学」[41]として位置づけている。では、存在が存在として問われるとは、いかなる方法でなされ、論じられていくべきだろうか。ハイデガー(Heidegger, M. 1889-1976)は著作『形而上学入門』の冒頭で、「形而上学の根本の問い」と題した章を設けて、「なぜ一体、存在者があるのか、そして、むしろ無ではないのか？」[42]とする問いを立てる。この問い自体は、ライプニッツによって初めてはっきりした形で提出された問いではあるが、ハイデガーはこの問いを形而上学における主要かつ根本的な問いと位置づけている。

4.2 概念の構造

概念の創出は、広範な対象を問い直すことであり、哲学そのものと呼ぶことができる。『哲学とは何か』を問うたドゥルーズ(Deleuze, G. 1925-1995)は一つの帰結として「概念」を挙げ、「哲学とは、いくつかの概念を形成したり、考案したり、制作したりする技術である」[43]と述べている。概念として名辞される哲学の中でも、一般性を表示する概念を、アリストテレスは『カテゴリー論』に著わし、実体、分量、性質、関係、場所、時間、状況、様態、能動、受動の10の概念から、「有るもの(ens)であって、他の何ものかの述語となることはない」[44]「実体」の概念を導く。美の本質を問い、存在の本質を問う過程に位置しながら、私たちは実体への問いを最後の議題に載せなければならない。実体を著作『エチカ』の冒頭から論じたスピノザは以下のように定義している。「定義三 実体とは、それ自身において存在し、それ自身にて考えられるものことである。言いかえれば、その概念を形成するために他のものの概念を必要としないものことである」[45]。「定理七 実体の本性とは存在することである」[46]。この実体の在り方を論拠にして、存在の根源を想起させられると共に、「美そのもの」として問われた本研究における美の本質を見定め、論及されなければならないことを指摘しておきたい。

4.3 実体の形而上学的見解

能産的自然と持続 —スピノザの実体論—

概念の考察を契機に実体へと議論を展開する過程で、重要な定義を与える哲学者としてスピノザ(Spinoza, B.

1632-1677)を議題にあげた。ここでは「幾何学的秩序に従って論証された」『エチカ』を中心に、スピノザの実体を美的論究の根幹に据えて、その本質を論述する。「自己原因とは、その本質が存在を含むもの、あるいはその本性が存在するとしか考えられえないもの、と解する」[47]。この定義にはじまる『エチカ』は、定義六における「神」の論証へと収斂している。畠中尚志(1899-1980)は『エチカ』序文でこの自己原因について簡潔にこう記している。「スピノザはこの自己原因を実体と等置し、実体を神と等置し、神を自然と等置する。神即自然である(汎神論)」[48]。スピノザの実体を通して自然が神と併置される、明確な定義が成されている。そしてさらに、スピノザの基本となる哲学的視座を「原因」と「目的」の語を用いて以下のように指摘する。「万物は神がそうあるべく決定した通りにあるのであってそれ以外の在りかたはできなかった。自然の中には単に原因のみがあって目的というものが存せず、万物の生起については『何ゆえ』ということのみが問題となりえて『何のために』ということは問題になりえないのである」[49]。スピノザのこのような決定論へと導かれる思索的態度は、幾何学的秩序をもって記述されていく。

「第一部 神について」における「定義」では、『エチカ』全体を見通すことのできる「自己原因」「実体」「様態」「変状」「神」と言った重要な概念が列挙され、これを起点に議論が展開する。神の定義に用いられた「実体」と名辞された概念を契機に、「存在しつづけようとする傾向」と規定されるスピノザの「コナトゥス(conatus)」についてドゥルーズは「コナトゥスの第一の規定」を引き続き、「無際限の持続」[50]へと議論を展開する。現実的事物における在り方の本質を存在に固執してどこまでも存続しようとする力能の中に見据えるスピノザの見解は、生命現象そのものの原理を「霊魂」として訳出されたアリストテレス「プシュケー」を想起させる。生命は有機体を自律的に組織し、組織された物質の中に命を宿しながら、それを維持しようと働く。このような生命の能動性ばかりでなく、スピノザは自然そのものを能産的自然と呼び、コナトゥスはこうした能動性、自律性の原因をなす働きの概念だということができる。生命に内包される、未だ解明を見ない「命の原理」それ自体に、スピノザは万物の本質を見出していることに、議論の核心を捉えなければならない。

森羅万象の要素 —ライプニッツのモナド論美学—

青山昌文はライプニッツ(Leibniz, G. W. 1646-1716)のモナド論美学を「美が秩序の上に成り立ち、秩序が調和に由来し、調和が〈多様における統一〉に外ならない」[51]としながら、その独自性を指摘し、「この〈多様における統一〉という古典的美学説を自らのモナド論に基礎づけている点にある」[52]と指摘している。ではそのモナドとはいかなる存在か、『モナドロジー』の訳者注では以下のように記している。「表象は、モナドの本性が表現にあることを示している。モナドが表象をもつとは、無数のモ

ナドが互いに厳密な対応関係を持ち、おのおのの一角が内に多を含みつつ持続することにはかならない」[53]と記述され、「モノドとは、複合体をつくっている、単一の実体のこと」[54]であり、そしてそれは、それ以上分割することもできない、部分をもたない「森羅万象の要素」[55]であるとしている。また、ライプニッツは生命、自然、宇宙へと広がる世界のなかでモノドを位置づけ、「どのモノドも、それぞれ宇宙を自分流に映しだしている鏡であり、かつ宇宙は、完全な秩序にしたがってとのえられているから、それを表現するものの側にも、秩序はかならずあるのである」[56]と記している。「物質のども部分も、古代の人たちが認めたような無限分割の可能性を秘めているだけでなく、現実におのおのお部分が、また多くの部分にと、どこまでも果てし無く細分されていて、しかも、その一つ一つの部分が、それぞれみな固有の運動をおこなっている」[57]と述べて、モノドに固有な運動によって宇宙全体を表出する、原因をなしているとして、「単一の実体」から「宇宙全体」への議論の展開を見せる。青山はこうした存在論が「自らのモノドの哲学そのものから直接に導出され」[58]ており、「美についての論が、世界についての哲学的な立場そのものに、直接に深く根ざしている」[59]ことを論拠に、「プラトンとアリストテレス以来の伝統の内しにしっかりと立っている、ヨーロッパの正統的な実在論美学者なのであり、プラトンとアリストテレスを、ディドロに繋げる、巨大な橋」[60]であるとして、青山美学における重要な存在論美学者として位置づけている。

4.4 持続する有機体 — 生命を問う哲学 —

4.4.1 思惟する実体 — ベルクソンの有機体論と持続 —

自然から与えられた、形相として認識されている存在構造は、生命、自然、宇宙へと連続する生成変化の中にある。絶え間なく成長し、あるいは絶え間なく老い、寿命において有限な生を生き、死を迎える「私」という存在は刻々と変化を遂げながらも持続され、連続した時間の中を過ごす。ベルクソン (Bergson, H. 1859-1941) は『存在する』という語は、正確に何を意味しているだろうか」[61]とした問いを立てて、その対象を生命そのものの在り方に向けて、持続する無機的存在から有機的存在への議論を進める。

「宇宙は持続する」[62]と記述したベルクソンによって意図されるのは、世界を構成する無機的存在、有機的存在の区別を超えた物質の在り方が、時間制を含みもつ絶え間のない変化にこそ、その根拠が示されることにある。こうした、宇宙全体、あるいは世界全体における物質の持続という存在の本質を考察するにあたり、『創造的進化』の本題に据えたのが有機体の特異な存在であった。有機体の現れとしての生命は物質の集合体でありながら、無機物質の振る舞いには認められない、自己を組織化し、思惟する個体としての特性を有している。生命としての個体が、思惟する「私」であることが、ひとつの神秘のように扱われるに

は、二元論的、機械論的思考によって分断された世界観がその契機にある。ハンス・ヨーナスは、生命の解釈を、その始原に求めてアニミズム的世界観を示し、「自然科学に端を発した存在論が現実総体の認識を支配するようになったのであって、この存在論は、生命の痕跡を剥ぎ取られた純粋な物質を基体としている」[63]として、近代科学的視点によって単純化された世界像を批判的に指摘する。生命なきものによって測定され、数値化された物理的宇宙像においては、「生命は物理的存在のなかの謎めいた例外」[64]として扱うしか方法を持ち得ていない。

ベルクソンの「持続」を改めて自然のなかに論じようとする場合、ドゥルーズの『ベルクソニズム』において言及された持続への考察に本質的理解が示されている。「持続とは、物質のもっとも収縮した程度にはかならず、物質とは持続のもっとも弛緩した程度なのである。しかしまた、持続とは能産的な自然＝本性のようなものであり、物質とは所産的な自然＝本性のようなものである」[65]。宇宙は潜在的な持続の全体であり、自然は多様に生成し消滅しながら持続される循環のなかで調和を保っている。出来つつあり、失われつつある実体の本性を能産的な自然によって名辭的に表現されるとすれば、私たちが「美」を捉えようとする試みは、こうした世界の在り方にこそ求められるものと思われる。「美」の探究が「存在」あるいは「実体」と称される哲学的対象に深く根ざしているとした、私たちの目論見は、もはや「美そのもの」の範疇を捉えているといってもよいだろう。生成し、消滅しながら持続される対象に、さらに議論を進めるために、次にはホワイトヘッドの哲学的思索を『過程と実在』のなかに、実在概念へと至る見解を求めることにしたい。

4.4.2 生命と宇宙の円環 — ホワイトヘッドの過程と自然 —

「ヨーロッパの哲学の伝統についての最も確かな一般的な特性描写は、それがプラトンについての一連の脚注から成り立っている、ということである」[66]としたホワイトヘッド (Whitehead, A. N. 1861-1947) のよく知られる記述には、プラトンに対する敬意と恩恵の深さが表現されており、さらに、その言葉のあとには、プラトンに言及するための根拠として、「私は、学者たちが定見もなくプラトンの著作から引き出した思想の体系的な図式のことを言っているのではない。私はプラトンの著作の到る処に散在している普遍的な思想の豊富さを言っているのである」[67]と述べている。『過程と実在』を訳出した山本誠作の見解を頼りに、ホワイトヘッド哲学の本質を読み解いてみることにしたい。ホワイトヘッドは宇宙を構成する最終的な事実を循環的実在として現実的実質の内実を明らかにしている。現実的実質とは「actual entity」の訳語であり、流動するある一定の形を保つことのない存在自体を捉えた実在を意味する。ホワイトヘッドは哲学について「言語の諸制約によって、宇宙の無限性を表現する試みである」[68]とも述べており、『過程と実在』は文字通りその試みを、緻密な思弁によって綴られた「宇宙の無限性」そのも

の表現であると言することができる。山本は、ホワイトヘッドの有機体の哲学が、形而上学的宇宙論という形で展開されているといわれる理由を、現実的実質の在り方に論拠をおいて、「世界」と「過程」、「実在」の概念を用いて、その本質を捉えようと試みる。「宇宙—世界といってもよい—は、前述したような『過程』と『実在』との絶えざる交替変化のうちにある現実的諸実質を通して、自らの秩序を形成しながら、不断の創造的前進のうちにある」[69]、「それ自身過程である現実的実質は、さしあたってまず、それ自身の『世界』のうちに置かれていること」[70]を確認しながら、その因果を捉えなおす。過程と実在が現実的実質として渾然となり世界を構成しているとするれば、「世界、つまり宇宙は、因となり果となって生成流転している現実的諸実質を媒介にして、絶えず自らを形成していく有機体的全体である」[71]として世界の在り方を示した。

自然哲学において、ひとつのものの見方であった科学的認識が独立した学問を形成していき、哲学との袂を分かち二元論的、機械論的思索を導入したデカルト以降の、分離された思考を再び繋ぎとめようとする試みを、ホワイトヘッド哲学に通底する理念として捉えることができる。そしてプリゴジンは総括するように、「ホワイトヘッドにとって哲学の仕事は、永遠性と変化を和解させることであり、事物を過程として把握することであり、生成が存在物を形作ること、生まれて死んでゆく個々の同一性を形作ることを示すことであった」[72]と述べて、『混沌からの秩序』で取り上げた、哲学的思索の重要な位置づけをおこなっている。こうした、ホワイトヘッドの「過程」に根拠づけられた「実体」は、プリゴジンの哲学的思索と相補完的な関係にあり、自己組織化、散逸構造といった新しい学問領域への扉を開く、多くの示唆を与えている。

4.5 実体と循環—生成と消滅の普遍的実在性—

4.5.1 結節点としての有機体

太古の宇宙を漂うガスと塵が集まって構成された原始の太陽系から、時間軸を辿り、物質によって構成され、思惟する生命としての私たちが存在するまでの長い道のりを省みれば、ガスや塵の集まりのなかにも、私たち生命へとつながる可能性と原因が、現在へとつながる時間の彼方に存在していたことは疑い得ないことだろう。生命そのものの発生に関わる自然科学的論拠をここでは究明しないとしても、原始の宇宙から原始の生命まで一度も途切れることなく、連鎖し、思惟する生命へと連なる、物質の有機体における結節点に、私たちは存在していることは確かである。この「命」として名辞される事象へ、「生成」と「消滅」の機縁をもって臨み、円環を成す生成流転の様相へ、その普遍的原理を問う議論をはじめることしよう。

4.5.2 自然実体における円環

生成し消滅する一連の自然実体における過程は、いかなる本質的な原理を示唆しているのだろうか。アリストテ

スは、『天体論』で元素とは何かを問い、「物体が分解されると出て来るものが元素といわれるものであり、それらは諸他の物体のうちにも可能的にまた現実的にふくまれている」[73]とし、「生成」以前の実体、そして、「消滅」以後の実体の在り方について議論の余地を与えている。『生成消滅論』は「地上の、より正確には月の軌道と大地間の領域における物体の、生成消滅運動を取り扱い、この変化の他の諸変化の差異を規定し、その諸原因を明らかにせんとするもの」[74]であると訳者の戸塚七郎は概要を示している。実体の基体への変化、基体から実体への変化は、原子論に見られる最小単位の基体の組み合わせの変化そのもののように捉えることができる。アリストテレスは「可能態としては有るけれども、現実態としては有らぬものが、事物の生成に先立って存在」[75]しなければならないとして、生成は「有らぬものの消滅」であり、消滅は「有らぬものの生成」とする、生成変化の本質を捉える。戸塚はこうしたアリストテレスの生成と消滅の議論を丁寧に考察し、「生成と言うも、消滅と言うも、それらは実体から実体への一つの変化を二つの面で捉えているにすぎない」[76]とする見解を示した。

アリストテレスはこうした生成消滅の絶え間ない流動的な事象について「或るものの生成が絶対的に必然的であるなら、その生成過程は円環をなし、再びもとに戻ってこなければならぬ」[77]と述べて、世界の円環的運動の論拠を示そうと試みている。この円環的な概念は、私たち生命の営み、自然における大気、海洋の循環、ひいては「月下のものたち」の原因をなす、月の周回や地球の公転にみられる諸天体の軌道においても、永続的円環運動が認められる。アリストテレスによって記述された世界像は、必然性のなかで永遠性が予見さる、自然実体における円環として諸事実の本質を描出している。

4.5.3 生成消滅を超えたプラトンの射程

田中美知太郎は『パイドロス』の記述を踏まえて以下のように述べている。「万物の根源、第一の原理となるのは、そのような死物、単なる物質ではなくて、むしろこれらのものの運動変化、生成などの始源となるものこそ第一に考えねばならぬとするわけである。そしてその生成変化の合理性、あるいは整然たる秩序（合法性）の始源となるものこそ第一のものでなければならぬとする」[78]。物質や生命、自然、宇宙に存在している物体、現象と称される事象は自発性、生命力といったようなものの顕在化した対象に過ぎず、プラトンの実体論は、より普遍的な原理を捉えている。『ティマイオス』における、「常に同一を保つもの」[79]は理性（知性）によって把握されるものであり、他方、「生成し消滅していて、常にあるということのけっしてないもの」[80]は思わく〔ドクサ〕によって、言論ぬきの感覚の助けを借りて思いなされるものであるとする。そこには、現象世界における真の実在たる「イデア」を想定して、夥しい物体や現象を超えた存在の本質へと連なる、哲学的思索の原点が示されている。生命や自然、宇宙

が「全存在連鎖の自然」として、ひとつの連なりのなかにあることを説明するには、アリストテレスによる現実世界の万学に及ぶ把握と見解が哲学の問いとして提示される一方で、プラトンのなりつつある感覚的対象を超えたところに「ある」とされる、真の存在への問いかけは、相互が補完的に世界の本質に臨みながら、その射程は現代の哲学的思索にまで及んでいる。

5. 結論

実体は循環そのものであり、また循環は実体そのものでもある。「ある」のではなく「なりゆく」世界の中で、美の本質を問うことを契機に、存在の在り方へと議論は展開し、存在それ自体が時間性を内包しながら、極めて動的であることが重ねて指摘されてきた。この在り方こそが、美を纏う現実的存在の臆見に依らない本質的な様相である。

実在的自然の内に連鎖、循環する実体を、万有の理の中に位置づけ、能動的に離散集合する諸局面の総体として世界を捉え直すことで、美的表象の存在論的論拠は導かれた。自然における諸現象は、持続という概念によって記述され、過程の中に生じた特異な位相が、私たちの存在、ひいては偶有性を含みもつ生命の本性として存在し、美への問いに明示的な論拠を与えている。生命の深奥には宇宙と見紛う世界が広がり、また、星の生き死にはさながら、生命そのものの様相でもある。生命や自然諸物の形相として世界に遍在する美的表象は、全存在が連鎖する自然と調和的であることを示し、有機体に顕在化した「命」と繋がりながら、移ろいゆくこの「生」を善きものとして包摂する。こうした、不断の循環を性状とする世界の実在的事象が「美」と名辞されるとき、私たちはそこで主客を超えて実体と向き合い、開示された存在の真理に結ばれている。

これが本研究によって導かれた可能的見解であり、美そのものを問う哲学的基礎づけは、生命、自然、宇宙が美によって繋がれ、ここに結語が与えられたと言ってよいだろう。しかしなお、哲学的思索によって基礎づけられた美への探究は、より広範な文献による検証が与えられ、善き生への道徳的、倫理的思索を包括しながら、この世界の存在、そして神や霊性の存在、それらの本性を再考し、相応しい語が論拠と共に導かれ、精緻な論究が重ねられなければならない。これ以降の論証は、ここに連なるさらなる哲学的探究に委ねることにして、本研究論文を結びたい。

文献

『ソクラテス以前哲学者断片集』（第Ⅰ～Ⅴ分冊、別冊）
岩波書店
プラトン『プラトン全集』（全15巻、別巻）岩波書店
アリストテレス『アリストテレス全集』（全17巻）岩波書店
スピノザ『エチカ』畠中尚志訳（岩波文庫、1951年）

バーネット『初期ギリシャ哲学』西川亮訳（以文社、1975年）
ベルクソン『創造的進化』合田正人、松井久訳（ちくま学芸文庫、2010年）
ハイデガー『存在と時間』高田珠樹訳（作品社、2013年）
ハンス・ヨナス『生命の哲学 有機体と自由』細見和之、吉本陵訳（法政大学出版局、2008年）
ホワイトヘッド『過程と実在』Ⅰ巻、Ⅱ巻、平林康之訳（みすず書房、1983年）
ライプニッツ『モノドロジー』清水富雄、竹田篤司訳（中央公論社、2005年）
マッハ『感覚の分析』須藤吾之助、廣松渉訳（法政大学出版局、1971年）
L. プリゴジン、I. スタンジュール『混沌からの秩序』伏見康治、伏見讓、松枝秀明訳（みすず書房、1987年）
青山昌文『美学・芸術学研究』（放送大学教育振興会、2019年）
熊野純彦『西洋哲学史』（岩波新書、2006年）
田中美知太郎『哲学からの考察』（岩波書店、1986年）
中村元『論理の構造』（青土社、2000年）
廣川洋一『ソクラテス以前の哲学者』（講談社学術文庫、1997年）

- [1] 青山昌文『美学・芸術学研究』（放送大学教育振興会、2019年）p. 241
- [2] アリストテレス『形而上学』出隆訳（岩波書店、アリストテレス全集12、1968年）p. 141
- [3] 青山昌文『美学・芸術学研究』（放送大学教育振興会、2019年）p. 79
- [4] 同上書p. 79
- [5] アリストテレス『自然学』出隆、岩崎充胤訳（岩波書店、アリストテレス全集3、1968年）p. 45
- [6] アリストテレス『動物部分論』島崎三郎訳（岩波書店、アリストテレス全集8、1969年）p. 282
- [7] 青山昌文『美学・芸術学研究』（放送大学教育振興会、2019年）p. 238
- [8] 同上書p. 241
- [9] 廣川洋一『ソクラテス以前の哲学者』（講談社学術文庫、1997年）p. 197
- [10] 同上書p. 199
- [11] 同上書p. 195
- [12] 青山昌文『美学・芸術学研究』（放送大学教育振興会、2019年）p. 85
- [13] 同上書p. 85
- [14] 同上書p. 85
- [15] 同上書p. 84
- [16] 清水純一「ルネサンス期の哲学」（田中美知太郎編『哲学の歴史』、人文書院、1975年）p. 200
- [17] 同上書p. 200
- [18] 同上書p. 202

- [19] エルンスト・マッハ『感覚の分析』須藤吾之助、廣松渉訳（法政大学出版局、1971年）p. 73
- [20] 同上書p. 84
- [21] 同上書p. 84
- [22] 同上書p. 86
- [23] シュレーディンガー『生命とは何か—物理的にみた生細胞—』岡小天、鎮目恭夫訳（岩波文庫、2008年）p. 138
- [24] 同上書p. 138
- [25] ハンス・ヨーナス『生命の哲学 有機体と自由』細見和之、吉本陵訳（法政大学出版局、2008年）p. 5
- [26] 三井秀樹『形之美とは何か』（NHK出版、2000年）p. 128
- [27] マルクス・ガブリエル『なぜ世界は存在しないのか』清水一浩訳（講談社選書メチエ、2018年）p. 121
- [28] バーネット『初期ギリシャ哲学』西川亮訳（以文社、1975年）p. 27
- [29] アリストテレス『形而上学』出隆訳（岩波書店、アリストテレス全集12、1968年）p. 13
- [30] 熊野純彦『西洋哲学史 古代から中世へ』（岩波新書、2006）pp. 5-6
- [31] 廣川洋一『ソクラテス以前の哲学者』（講談社学術文庫、1997年）p. 52
- [32] プラトン『クラテュロス』水地宗明訳（岩波書店、プラトン全集2、1974年）pp. 61-62
- [33] 『ソクラテス以前哲学者断片集』内山勝利訳（岩波書店、第I分冊、1996年）p. 317
- [34] 廣川洋一『ソクラテス以前の哲学者』（講談社学術文庫、1997年）p. 118
- [35] 藤沢令夫「ギリシャ古典期の哲学」（田中美知太郎編『哲学の歴史』、人文書院、1975年）p. 72
- [36] 同上書p. 74
- [37] アリストテレス『形而上学』出隆訳（岩波書店、アリストテレス全集12、1968年）pp. 20-21
- [38] 廣川洋一『ソクラテス以前の哲学者』（講談社学術文庫、1997年）p. 153
- [39] 同上書p. 153
- [40] 熊野純彦『西洋哲学史 古代から中世へ』（岩波新書、2006）p. 112
- [41] アリストテレス『形而上学』出隆訳（岩波書店、アリストテレス全集12、1968年）p. 91
- [42] ハイデッガー『形而上学入門』川原栄峰訳（平凡社、1994年）p. 11
- [43] ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ『哲学とは何か』財津理訳（河出書房新社、1997年）p. 6
- [44] 中村元『論理の構造 上巻』（青土社、2000年）p. 243
- [45] スピノザ『エチカ』工藤喜作、斎藤博訳（中公クラシックス、2007年）p. 3
- [46] 同上書p. 11
- [47] スピノザ『エチカ』畠中尚志訳（岩波文庫、1951年）p. 41
- [48] 同上書p. 17
- [49] 同上書p. 17
- [50] ドゥルーズ『スピノザ』鈴木雅大訳（平凡社、1994年）p. 187
- [51] 青山昌文『美学・芸術学研究』（放送大学教育振興会、2019年）p. 49
- [52] 同上書p. 49
- [53] ライプニッツ『モナドロジー』清水富雄、竹田篤司訳（中央公論社、2005年）p. 37
- [54] 同上書p. 3
- [55] 同上書p. 3
- [56] 同上書p. 25
- [57] 同上書p. 26
- [58] 青山昌文『美学・芸術学研究』（放送大学教育振興会、2019年）p. 50
- [59] 同上書p. 50
- [60] 同上書p. 50
- [61] ベルクソン『創造的進化』合田正人、松井久訳（ちくま学芸文庫、2010年）p. 17
- [62] 同上書p. 30
- [63] ハンス・ヨーナス『生命の哲学 有機体と自由』細見和之、吉本陵訳（法政大学出版局、2008年）p. 16
- [64] 同上書p. 17
- [65] ドゥルーズ『ベルクソニズム』檜垣立哉、小林卓也訳（法政大学出版局、2017年）p. 103
- [66] ホワイトヘッド『過程と実在』1 平林康之訳（みすず書房、1983年）p. 58
- [67] 同上書p. 58
- [68] 山本誠作『ホワイトヘッド 過程と実在』（晃洋書房、2011年）p. 26
- [69] 同上書p. 26
- [70] 同上書p. 26
- [71] 同上書p. 27
- [72] L. プリゴジン、I. スタンジュール『混沌からの秩序』伏見康治、伏見讓、松枝秀明訳（みすず書房、1987年）p. 148
- [73] アリストテレス『天体論』村治能就訳（岩波書店、アリストテレス全集4、1968年）p. 211
- [74] アリストテレス『生成消滅論』戸塚七郎訳（岩波書店、アリストテレス全集4、1968年）p. 410
- [75] 同上書p. 251
- [76] 同上書p. 412
- [77] 同上書p. 346
- [78] 田中美知太郎『哲学からの考察』（岩波書店、1986年）p. 54
- [79] プラトン『ティマイオス』種山恭子訳（岩波書店、プラトン全集12、1975年）p. 27
- [80] 同上書p. 27